

演 題 名 : 血漿 L-カルニチンの上昇がみられた猫の虚血性心疾患を疑う一例

発表者氏名 : ○大池三千男

発表者所属 : おおいけ動物病院・帯広

1. はじめに: L-カルニチンの脂肪代謝における重要性が注目されているが、L-カルニチン欠乏は犬の拡張型心筋症の原因の一つである。演者は平成 14 年度本学会において、虚血性心疾患で心筋壊死を起こした犬が高 L-カルニチン血症を呈していた事を報告した。平成 15 年度には、完全心ブロックをおこした心筋虚血状態の猫においても血漿 L-カルニチンの上昇がみられた事を報告した。今回、虚血性心疾患を疑った猫において血漿 L-カルニチンの上昇を認めたので報告する。
2. 症例: 雑種猫、雄、未去勢、7 か月齢、体重 4.12kg。昨日から、食欲、飲水欲なく、便をしたそうにするがしない。四肢が冷たい。昨日他院で頭をなでられたただけだった。身体検査では、体温 38.6°C、心拍数 96 回/分、心雑音は聴取せず。呼吸数 40 回/分(腹式)。閉眼、軽度流涎、虚脱横臥状態で動きたがらない。四肢冷感。
3. 治療および経過: 血液検査では、ヘマトクリットの上昇がみられた。収縮期血圧は、120mmHg であった。胸部 X 線検査では、VHS=9.6V、W=4.7V と心陰影の拡大が認められた。心エコー検査では、初診時 FS= 22.3%と低下していたが、第 8 病日の退院時では 49.3%に改善した。また、初診時の左心房は 14.5mm と拡大していたが、第 8 病日には 10.6mm に縮小した。心電図検査では、II 誘導において、S-T 分節のわずかな上昇と T 波の増高がみられた。血漿 L-カルニチンは初診時 82.1 $\mu\text{mol/l}$ と増加していたが、第 39 病日には 11.4 $\mu\text{mol/l}$ と正常値に減少していた。虚血性心疾患を疑い、硝酸イソソルビドのスプレーを時間を置いて 2 回投与し、流涎が治まった。硝酸イソソルビドとジピリダモールの投与を約 2 か月間投与。アンピシリンとプレドニゾロンを 4 日間投与。乳酸リンゲルを初日約 100ml、その後 3 日間約 50ml を投与した。食欲は第 3 病日から回復し、流涎は第 2 病日と第 3 病日の食後にみられた。第 4 病日には四肢に温感が回復した。第 8 病日に退院とした。第 12 病日には自宅で走り回るようになった。
3. 考察: 過去、犬と猫において、心筋虚血時に血漿 L-カルニチンが上昇する事を報告した。これは、心筋細胞からの流出と考えられる。本症例は、心不全所見と S-T 分節のわずかな上昇、T 波の増高も見られた。これらの所見から虚血性心疾患を疑い、症例はその治療にも反応し、臨床症状も改善された。また、初診時の血漿 L-カルニチンは上昇しており、臨床症状の回復時には正常値に低下していた。血漿 L-カルニチンは猫の虚血性心疾患の診断に役立つ可能性が示唆された。